

素晴らしい映画だった。苦しくて息も出来ない映画。

デンマークの冷たくも美しい風景…

そして、なんと言ってもマッツ・ミケルセンのあの顔!

息も詰まるあの演技!

そしてこの映画で重要な役割を握る少女の信じられないあの眼差し!

こんなにも苦しく息も出来ない映画をどうして私は観てしまったのか…!?

是非映画館で観て欲しい映画だ。

—— 竹中直人さん(俳優・映画監督)



セクシーなミケルセンの魂を揺さぶる演技に震え、
衝撃のラストに痺れた!

—— 弓山奈穂実さん(ELLE JAPON編集部)

[順不同]

この作品は見る者に、必ず恩恵をもたらすだろう。

人の日常は、まさにこの映画のように繰り返されているからだ。

そして見終わった後自らを戒めようではないか。

「ありきたりの判断にこそ、
妄想の蔦がびっしり絡みついているのだ」と。

—— 名越康文さん(精神科医)

たとえ誇りを奪われようと、
人には闘わなければならないときがある。
憂いと怒りをたたえたミケルセンの渾身の演技に震えた。

—— 石井百合子さん(シネマトゥデイ編集部)



子どもは感情の赴くままに話を作ることがある。多くは罪のない嘘で終わる。

ただ、ふだん大人が意識の底に潜えているものを刺激すると、

その嘘は不条理な流れを作り関わるもののすべてを巻き込んで堰き止めようがなくなる。

クララの嘘は不信と憎悪の洪水を起し、その後に茫漠とした虚しさが残る。

信頼と友情への回帰はそこから始まる。

子どもの時についた嘘のいくつかを思い出して慄いていた僕は

ハッピーエンドかと救われた気持ちになった。

しかし、衝撃のラストシーンにその気持は一瞬のうちに凍りついた。

何が起きたのかよく解らない。

問責の一矢が人間の原罪意識を見事に捉えたということだろう。

観なずに死ねない怖い映画である。

—— 志茂田景樹さん(作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長)



家族、友情、誇り、そして真実——決して、譲れないものがある

離婚と失業の試練を乗り越え、ようやく穏やかな日常を取り戻した幼稚園教師・ルーカス。そんな彼がある日、親友テオの娘クララの作り話が元で変質者の烙印を押されてしまう。あるのはクララの証言のみ。無実を証明できる手立ては何もない。町の住人たちはおろか、唯一無二の親友だと信じて疑わなかったテオまでもが、幼いクララの言葉を疑いなく信じ込み、身の潔白を説明しようとするルーカスの声に耳を貸そうとしない。噂はあっという間に町中に広がり、仕事も親友も、信用も全てを失ったルーカスは小さい町で孤立してしまう。ルーカスに向けられる憎悪と敵意がますますエスカレートし、一人息子のマルクスにまで危害が及ぶ事態に心を痛めながらも、ひたすら耐え続ける生活を余儀なくされるルーカス。——クリスマス・イブがやってきた。追い詰められたルーカスはある決意を胸に、テオや町の住人たちが集う教会へと向かった——



Af børn og fulde folk
skal man høre sandheden

子供と酔っぱらいは嘘をつかない
——デンマークの諺